名古屋市立大学大学院人間文化研究科　人間文化研究　第12号　2009年12月

〔学術論文〕

「日系カナダ人のディアスポラ――Joy Kogawa's *Obasan*」

新　井　　透

要旨　Joy Kogawaの*Obasan*は第二次世界大戦の最中の日系カナダ人の強制収容体験を描いた最初の本格的な小説である。本稿では、家族の分断や離散を経験した日系カナダ人のディアスポラの記憶―集団的記憶と小説の主人公の沈黙の背後にある抑圧された記憶とを結びつけるものを明らかにする。それは戦争によって家族から引き離された主人公の精神的な探求の旅、すなわちアイデンティティの探求を通してこれまで忘却されてきた、あるいは語ることのできない記憶を蘇らせるのである。グローバル化していく現代、多くの人々がさまざまな理由で国境を越えて行き来しているが、人種・民族の軋轢、文化変容の問題、文化的差異をめぐる葛藤など社会問題化しているなかで、Kogawaの小説は大きな役割を果たすであろう。

キーワード：日系カナダ人、ディアスポラ、記憶、アイデンティティ

はじめに

文化の混交と文化的アイデンティティの問い直しの時代にあって、新たな主体性の産出を理解するための道の一つは、移民作家たちの言葉、より正確には移動するエクリチュールに耳を傾けることである（オリヴィエ　32）。

Joy Kogawa（1935～）は1981年に*Obasan*を出版した。これは第二次大戦中の日系カナダ人（帰化していない日本人も含む）の強制収容の体験を扱った最初の小説（Willis 239, Kanefsky 11）であり、また日系アメリカ人を含め、北アメリカに在住する日系人の強制収容の体験についての最も重要な小説であるといえるだろう。『おばさん』という日本語のタイトルは、これまで他者化され、周縁的価値を強いられてきたマイノリティの言語がいままで隠蔽されてきた日系カナダ人の歴史を明らかにし、過去と未来の間で引き裂かれた流浪の苦しみの現在、ディアスポラの物語を語る（ホール　92）。諸言語が混在することによって、より豊かな表現形態を作り出している[注1]。

ディアスポラとは、ギリシア語が語源であるが、歴史的にはバビロン捕囚後のユダヤ人の離散

状況を意味した。しかしながらグローバル化の現在、移民、難民、外国人労働者等、広い意味で用いられるようになっている（載113、クリフォード120）。コガワの自伝的小説『おばさん』にはカナダ西海岸に住む2万1千人もの日系人の財産の没収や強制立ち退きにサバイバルしてきた姿が描かれている。この小説の主人公は家族分断や離散を体験し、それは心の傷として刻印され長い間沈黙を強いられた。しかしこうした沈黙を破ることにより、すなわち過去の記憶に向き合うことにより自己を回復していくのである。

コガワは、1935年バンクーバー生まれの日系カナダ人２世である。父はカナダ聖公会の司祭を務め、母も伝道師であり、敬虔なクリスチャンの両親のもとに育った。ちなみに兄Tim Nakayamaも現在シアトルで監督派教会の聖職者に就いている(注2)。また小説『おばさん』に登場する中山牧師はコガワの父をモデルにしている。『おばさん』にも描かれているように、コガワの家族もまた戦時中、バンクーバーから立ち退かされ、ヘイスティングスパークの仮収容所に収容された。その後ブリティッシュ・コロンビア州（以下BC州と記す）内陸部のゴーストタウンに転居し、戦後も家に戻ることが許されず、ロッキー山脈東側のアルバータ州、コールデイルにてキャンプ生活を送らなければならなかった。小説の主人公ナオミは５歳になっているが、当時６歳であった作者の実体験が投影されている。またカナダ国立公文書館に保存されていた書類や、女性ジャーナリストMuriel Kitagawaが弟にあてた手紙などが使用されており、史実に基づく自伝的要素の色濃い作品である（Wayne 23, Cheung 131, Peterson 141）。

日系カナダ人たちの離散や分断の経験は、植民地主義や奴隷制を体験したアフリカ系アメリカ人や、強制移住を強いられたアメリカ先住民、さらにはナチス・ドイツによる強制収容所を体験したユダヤ人、あるいは日本帝国主義によって強制連行された朝鮮半島の人々と同様、悲惨な体験を潜り抜けた生存者の「トラウマ的記憶」（鹿島46、カルース ７）を引きずっている。彼らの体験は、強制されたディアスポラの歴史（ホール92）として考えることができるであろう。

カナダでは、1971年トルドー首相が「多文化主義」（Multiculturalism）という政策を発表した。これはケベック州のフランス系の住民の言語文化の保持を強調した「二言語・二文化主義」に反発する、ウクライナ系やユダヤ系などの白人マイノリティ集団の不満に答えようとする統合政策であった。その後1980年代になると多様な移民、難民の増加によって多文化主義政策は発展・変容していった。これまで不可視的存在であった有色人マイノリティの可視化、とくにアジア系移民に対する長年にわたる不平等や格差の是正、すなわち人種的偏見などさまざまな差別的障害を取り除き、カナダ社会に完全に参加し、平等の権利を認める方向へ移っていった（飯野159）のである。

こうした時流の中で日系人たちは、過去の人権侵害に対する政府の謝罪と「金銭的補償」を求めるリドレス運動を展開し、多文化主義政策はその運動の進展に大きな影響を与えた。コガワ自身もリドレス運動に積極的にかかわったといわれている。彼女はトルドー首相のもとで秘書として

働いたこともある（長岡 463）。1980年代、そうした状況のなかで、日系カナダ人に対する迫害を描いた『おばさん』は日系人コミュニティだけでなく、カナダ社会全般にも影響を及ぼしたといえるだろう[注3]。つまり一世たちの多くはすでに世を去って、二世も中高年にさしかかり、戦時中の記憶が薄れかけてきたときにコガワは『おばさん』を発表し、大きな反響を呼んだのである。『おばさん』は、カナダはもとよりアメリカやイギリスなど英語圏だけでなく、ドイツ語やフランス語、ヘブライ語などに翻訳され、またカナダ文学賞を始めアメリカ図書賞など数多くの文学賞を受賞し、内外の注目を浴びた作品である（Cheung 129-30、Willis 239、長岡461-65）。日本では1983年に『失われた祖国』という邦題で長岡沙里によって翻訳されており、さらに98年には文庫版が出版され、歴史家の猿谷要が巻末の解説で絶賛している[注4]。

E.Kimは、アジア系アメリカ文学を理解するのに社会史的コンテキストの理解が必要であると述べている（xviii）。すなわち多くのアジア系アメリカ人の作品には、アフリカ系アメリカ人やアメリカ先住民など他のマイノリティ文学と同様、排除と破壊によって引き裂かれた歴史の記憶が含まれているからである。それゆえRay Chawが指摘しているように、北アメリカではアジア系文学の研究をアジア系移民の歴史に関する知識と切り離すことは不可能である（224）といえるかもしれない。また猿谷は、コガワの小説を読む上で、日系カナダ人の歴史的背景についての知識が必要であると指摘している（468）が、同様の理由によるものであろう。

本稿ではそれゆえ、まず日系カナダ人の移民の歴史について概観し、この小説の背景を理解していきたい。次にこれまで隠蔽され抑圧されてきたもの、歴史叙述の中に埋没されてしまったもの（オリヴィエ　33）—日系カナダ人のデイアスポラの記憶—を、主人公ナオミを通して明らかにしようと思う。それは戦争によって家を失い家族が離散し、忘却された過去を巡るナオミの精神的な探求の旅、すなわちアイデンティティの探求でもある。グローバル化された現代社会において、多くの人々がさまざまな理由で国境を越えて行き来しているが、文化変容の問題や人種・民族間の軋轢、文化的差異をめぐる葛藤など、欧米先進諸国だけでなく日本でもたくさんの問題を抱えている。コガワの小説はそうした問題に真摯に立ち向かった作品として評価できる。

1．日系カナダ人の苦闘の歴史

カナダに最初に入国した日本人は長崎県出身の永野万蔵で、1877年のことである。彼はBC州で鮮魚や沖仲仕の仕事に従事した後、日本物産店を経営し、日本への鮭の輸出や旅館経営にまで事業を拡大して、日系人社会の名士にまでなったといわれている（飯野3）。当初カナダに入国した日本人たちは、安価な労働力として漁業や炭鉱、山林伐木、鉄道敷設など過酷な筋肉労働を提供する出稼ぎ労働者であった。やがてこうした一匹狼のような生活から同郷人同士が集まり、県人会などを組織して定住するようになった。その結果、勤勉な日本人に仕事を奪われるのではな

いかと不安を感じた白人の間に反日感情が生まれ、1907年にはバンクーバーで暴動が起きた。商店主や組合の指導者たちによって先導された約1500人ものヨーロッパ系カナダ人の群集が、中国人や日本人居住区を行進した後、暴徒と化して襲撃した（Adachi 63-85）。また隣国アメリカの西海岸地域と呼応するかのように、カナダにおいても日本人移民を排除しようとする「黄禍論」が広がった。これは、アジア系の人々との経済競争に対して脅威を抱くヨーロッパ系の人々の人種感情によるものであった。

日本政府はこうした排日運動に憂慮して、アメリカ政府と「紳士協定」を結んだように、カナダ政府ともルミュー協約を結んで、日本からの男性労働者および奉公人への旅券発行を制限した。これまで移民の大半は独身男性であったが、やがて家族を日本から呼び寄せ、20世紀初めにはルミュー協約の制限を免れた多くの「写真花嫁」が移民社会に入ってきた。その結果、BC州の排日運動はその後も衰えることがなかった。その根底にはアジア系カナダ人に対する人種的偏見を見逃すことができない。白人たちは日系人の土地所有の禁止を求める土地法の制定や、漁業ライセンスの削減を求める運動など、生活基盤を脅かす法的措置を政府に求めた（飯野77-98）。

1930年代になると、満州事変の報道に触発された反日感情が高まる中、日本帝国主義が太平洋岸に住むカナダ人たちへの脅威になるといった「黄禍論」が再び浮上してきた。そして1941年12月7日、日本軍が英米に対して開戦すると、カナダは直ちに対日戦線を布告した。カナダ政府は日本人、帰化人、カナダ生まれの日系人のすべてを「敵国人」と規定し、日本語学校は閉鎖され、『大陸新報』など日本語新聞3紙は発行停止となった。扇動的な地元の新聞や野心的な政治家たちは、BC州内の日系人による第５列活動（スパイ活動）のうわさや憶測を駆り立て、排日感情を煽った。

W.F.マッケンジー首相は、1942年2月24日内閣令を発令し、BC州内の５つの『防衛地域』から約21,000人の日系カナダ人の立ち退きを命じた。彼らの多くは、ヘイスティングパーク仮収容所へ強制的に収容され、さらにその後、BC州内陸部およびアルバータ州やマニトバ州へ移動させられ、日系人コミュニティは分断状態になってしまった。また彼らが残していった農場などの不動産や、1200隻におよぶ漁船などの動産は政府によって不当に売却された。こうした集団的な強制移住は人種的偏見に基づいていたことは言うまでもない。戦後、日系アメリカ人は西海岸に戻ることが許されたが、日系カナダ人はアングロ・サクソン文化に同化してロッキー山脈東側に再転住するか、それとも日本に帰国するかの選択を迫られたのである（Weglyn 190-91）。BC州に帰還することが許されたのは、1949年になってからのことだった。

カナダ政府は1960年代になると再び日本人に門戸を開くようになり、少しずつではあるが、新たな移民が入国を始めた。そして1977年のカナダ移住100周年を機に、全加日系市民協会（NJCCA）の全国大会で賠償請求運動（リドレス運動）が取り上げられ、３世を中心に運動が進められた。初めは戦時中の体験を恥と感じて、運動に消極的な日系人が多かった。しかしやがて彼らの沈黙は怒りに変わり、これまでの主流社会の不正を是正することを訴えるようになった。粘り強い運

動の結果、1988年にマルルーニ首相が議会で日系人に対して公式に謝罪し、生存者一人当たり２万１千ドルの個人賠償を認めた。コガワの『おばさん』は、カナダ政府のこうした政治的判断に対して、大きな影響を与えたといわれている（Willis 239）。運動の成功によって、日系カナダ人は自信や誇りを取り戻し、経済的・社会的地位の向上につながった。また彼女はこの小説の姉妹編である*Itsuka*（1992）のなかで、リドレス運動に揺れる日系人コミュニティについて書き記している。

２．沈黙

> There is a silence that cannot speak.
>
> There is a silence that will not speak.
>
> Beneath the grass the speaking dreams and beneath the dreams is a sensate sea. The speech that frees comes forth from that amniotic deep (注5).

小説『おばさん』は1972年8月9日、主人公ナオミがおじと二人でアルバータ州グラントンの谷間にいる場面から始まっている。この直後の9月13日におじは突然亡くなる。巧みなフラッシュバックによって時間は1954年8月9日に遡り、ナオミが18歳のとき、おじと初めてこの谷間に来たときのことが語られる。コガワは直線的な時間の流れを断片化し、それによって重層的なイメージを創り出すことを可能にしている。

8月9日は、コガワはここでは説明していないが、1945年、長崎に原爆が投下された日であり、最後に明らかになるようにナオミの母が被爆した運命の日でもある。したがっておじがその後、毎年この時期にナオミをこの場所に連れてくるようになった理由は、彼女には知らされてはいないが、ナオミの母の墓参り（鎮魂）が目的であると考えることができるだろう。果てしなく広がるアルバータの草原は太平洋の大海原を想像することができ、その向こう岸には彼女の母が眠る日本がある。ここには時空を超えたイメージの広がりがみられる。この小説の重要なテーマのひとつは探求であり、それはナオミの母の不在の意味について、すなわちナオミのアイデンティティにもつながる探求である。

この小説には題名にあるように、二人の対照的な「おばさん」が登場する。ナオミの父の異母兄弟、イサムおじさんの妻であるアヤおばさんのことを“obasan”と呼び、一方でエミリーおばさんはナオミの母の妹で、“aunt Emily”と呼ばれている。異なる表現は、二人のアイデンティティの差異—前者はホスト国にいて伝統的な日本文化を固守しており、後者は二世でカナダ社会に同化しようとする—を強調している。またアヤおばさんは一世であり、カナダに帰化することのできない日本人であった。彼女はナオミにとって母と同様、日本人女性のイコンである（Willis

240)。

次の引用は、エミリーがトロントから初めてナオミたちのところへやって来て2ヶ月後のことである。実はナオミの母の死を知らせるためであったことが後に明らかになるが、このときはあまりにも悲惨な事実であったために結局こどもたちには伝えられず、おじが亡くなるまで18年間ものあいだ封印されることになった。つまりそれは「語ることのできない沈黙」である。

> The first time Uncle and I came for a walk was in 1954, in August, two months after Aunt Emily's initial visit to Granton. For weeks after she left, Uncle seemed distressed, pacing back and forth…Then one evening we came here (3).

上記の引用にはおじが突然動揺する様子が描かれているが、当時18歳のナオミには理解できない。語り手である主人公がまだ若すぎるために、大人たちの心情を理解することができないのである。ナオミがなぜ毎年こんな場所につれてくるのかと訝っておじに尋ねると、彼は何か言いたそうな様子なのだが、沈黙を守る。

King-Kok Cheungはその著*Articulate Silences*のなかで、コガワやMaxine.Hong Kingston、Hisaye Yamamotoらアジア系アメリカ人作家たちの作品について、さまざまなタイプの沈黙という観点から論じているが、沈黙を否定的、消極的な態度だと考える欧米文化とは対照的な、日本人や中国人の沈黙に対する積極的な意味を指摘している(127-28)。アヤおばさんの沈黙は、日系人たちが強制収容の歴史について長い間沈黙してきたことと密接につながっている。つまり彼女の沈黙には人種差別や強制収容、貧困といった過去の体験の記憶が内面に抑圧されている。

> …The memories that are left seem barely real. Gray shapes in the water… Passing shadows (25).
>
> The memories were drowned in whirlpool of a protective silence I could hear the adults whispering, "Kodomono tame" (26).

語ることができない過去についての「トラウマ的記憶」をナオミは少しずつ解きほぐしていかなければならないのである。"Only fragments relate me to them now, to this young woman, my mother and me, her infant daughter…Parts of a house. Segments of stories" (64).

小説のなかで写真は過去と現在を結ぶ断片的な手がかり、ここでは「家族の物語の断片」(テッサ・モーリス102)として重要な役割をしている。ナオミにとって、写真は母の不在を埋める唯一のもの、つまり母との記憶の断片を重ね合わせるものとして機能している。たとえば兄スティーヴンの誕生祝の家族写真がある。この写真を通して、ナオミの両親やおじ夫婦の過去が遡

及されていく。ナオミの両親は共同体で初めて見合い結婚ではなく、恋愛結婚で結ばれたとされている（24）。当時、日系人社会では見合い結婚の変形である写真婚[注6]が一般的で、両親の恋愛結婚は夫婦愛の絆の強さを象徴している。また同時に、二世である彼らがいかにカナダ社会に同化しようとしていたかを示している。ちなみにおじ夫婦は、伝統的な見合い結婚である。

スティーヴンやナオミが生まれた1930年代は、日系人たちがさまざまな差別、偏見を乗り越えて、ようやくカナダ社会に着実に根をおろしはじめた時期である。ナオミの母方の祖父はカナダに来て医学を学んで医者になり、父方の祖父は西海岸でも指折りの船大工として認められ、ボートショップを開業し繁盛していた。前述の家族の集合写真は、移民として成功した人々の記録である。しかしこのような日系人たちの幸福な生活は長くは続かなかった。コガワは、戦争という運命のいたずらによって翻弄されていく家族の様子を写真を手がかりにして明らかにする。

もう1枚の写真、すなわち1941年９月、バンクーバーの港で家族たちが東京へ向かうナオミの母と祖母を見送る写真である。目前に迫っている戦争によって家族が引き裂かれてしまうことなど、当時誰も予測することはできなかった。写真は過去の記憶、つまり人間の運命の皮肉を記録しているとともに、時間の不可逆性を表している。読者は写真に映っている家族の満面の笑顔とは裏腹に、戦争の悲劇が迫っていることを痛ましく感じるであろう。

戦争によってナオミの家族は離散を余儀なくされるが、一方で精神的に母と娘を引き裂く出来事が起きる。隣に住む白人のガウワー老人が、卑劣にも幼いナオミに性的ないたずらを繰り返したことが述べられている。ナオミは母に語ることのできない秘密を持つこと、すなわちガウアー老人とある種の「共犯関係」（Magnusson 64）ができてしまったと思い悩み、深い罪悪感にとらわれる。レイプの被害者の多くは、ナオミのように自分に過失があったのではないかという罪悪感から、自己を責めるようになるといわれている[注7]。コガワは3作目の長編小説 *The Rain Ascends*（1995）で、聖職者による児童への性的虐待をテーマにして話題になった。

ナオミは、これまで一体感を感じていた母がいなくなってしまったのは、自分が母を裏切ったことによる罰であり、そのために母との絆が失われてしまったのではないかと思うようになる。彼女にとって夢の中に現れる大審問官はガウワー老人の化身であり、自分を苦しめ断罪するのである。また別の夢の中では、若い女性が兵士によって脚を切断されてしまうが、それは性的虐待を受けたことが原因だと思われるナオミの精神的な不具を象徴し（Harris 53）、同時に母と娘の関係の切断、つまり絆の喪失を意味している。それはナオミにとって、アイデンティティの危機につながるのである。

アメリカやカナダの太平洋岸に住む日系人たちにとって、日本軍の開戦直後に「敵性外国人」として市民権のない一世だけでなく、市民権を有する二世たちまで強制的に立ち退かされたことは終生忘れることができない心の傷となった。コガワが『いつか』のなかで述べているように、それはレイプされたような屈辱的な体験でもあった[注8]。したがって白人による性的陵辱の被害

者であるナオミは、日系カナダ人たちの集団的体験の隠喩として考えることができる。第二次大戦前の中国系アメリカ人の男性の多くが、白人による人種差別や身体的、精神的暴力によって去勢されたような意識を持っていたといわれる（Eng 21）。性的虐待や政治的抑圧の犠牲者の多くはPTSD（心的外傷後ストレス障害）と呼ばれ、彼らの心の傷は癒されず、言語化されることなく個人の記憶の中に封印される（下河辺14）のである。

人種差別的偏見にもとづく日系人に対する強制移住の体験は、集団的トラウマとして長い間語ることができずに、記憶のなかに留められてきた。敵性外国人として烙印を押された日系人が長い間抱いていた罪悪感や自己嫌悪、自尊心の喪失といった感情はナオミも共有している。彼女の受けた性的陵辱もまた癒すことのできないトラウマとなって内面に抑圧され、沈黙を余儀なくされることになった。こうした集団の歴史的体験と個人の体験の記憶は分節化され、テクストはより複雑に交錯する。

ナオミはおじが亡くなったことがきっかけになり、自分を含め日系人が被った悲惨な体験について、エミリーの日記から断片的な記憶をたどっていこうとする。

> Ghost towns such as Slocan—those old mining settlements, sometimes abandoned, sometimes with a remnant community—were reopened, and row upon row of two-family wooden huts were erected. Eventually the whole coast was cleared and everyone of the Japanese race in Vancouver was sent away…Wars and rumors of wars, racial hatreds and fears are with us still（93）.

アメリカでは不毛な砂漠地帯やロッキー山脈の寒冷地に10箇所の収容所が建設されたが、カナダでも人里離れた内陸部のゴーストタウンが日系人の収容所として利用された（Ikeda 120-28）。バンクーバーの日系人コミュニティが完全に消滅した状況が上記の引用に記されている。コガワはこの小説を通して、戦争とか人種的憎悪といったことが今もなお世界から払拭することができないと訴えているのではないだろうか。

2001年9月11日のアメリカに対するテロ事件を機に、アメリカ国内におけるアラブ人への偏見や暴力が問題になり、戦時中の強制収容の体験からこうした人種差別的な報復を危惧する日系人も少なくない。したがってコガワの作品も含めて、日系アメリカ人や日系カナダ人たちが強制収容を描いた文学作品は、忘却されることなく今後も読み継がれていかなければならないであろう。

前述の日系アメリカ人二世作家のヤマモトは、同世代の日系アメリカ人作家たちにとって、第２次世界大戦時における強制収容の体験の認識は絶対的なものであると述べている（Yamamoto 69）。Monica SoneやJohn Okada、Mitsue Yamadaといった二世作家のみならず、Lawson InadaやJannice Mirikitaniのような三世たちもまた、過去の不幸な体験の記憶を封印してきた日

系人たちについて描いている。

ナオミたちが暮らしていたスローカンのゴーストタウンはかつてゴールドラッシュに沸いたが、今では住む人も少ないこの町の周囲には日系人が多く住むようになった。しかし1945年、日本が戦争に敗れた後も彼らはバンクーバーには戻ることができなかった。それどころか日本に帰国するか、ロッキー山脈の東部の平原州に移動するかの選択を迫られたのである。多くの日系カナダ人にとって祖国とは日本ではなく、バンクーバーとその周辺地域であった。住み慣れた土地や家に戻ることが彼らの願望であったが、戦後そうした望みは叶わず、家族が離散（ディアスポラ的経験）することも少なくなかった。小説のなかでも本国送還拡散政策は残酷極まりない結果を日系カナダ人にもたらしたと、当時の宣教師たちがカナダ政府に抗議している（220）。

次の引用は、エミリーがナオミに送った新聞の切抜きの抜粋である。日系人の家族の写真とキャプションが掲載されている。

> There is a folder in Aunt Emily's package containing only one newspaper clipping and an index card with the words "Facts about evacuees in Alberta."
> The newspaper clipping has a photograph of one family, all smiles, standing around a pile of beets. The caption reads: "Grinning and Happy."
>
> Find Jap Evacuees Best Beet Workers
>
> Lethbridge, Alberta. Jan. 22 (231)

エミリーは、当時の日系カナダ人の資料として客観的に分類しているように思われる。しかし新聞の「見出し」にあるように、日系カナダ人に対するあからさまな人種的偏見に基づくまなざし、すなわち"grinning"という英語に含意されているような、メディアによって歪められた他者のイメージがある。支配的な白人の視線は真実を歪曲し、従順で働き者というステレオタイプの日本人像をつくりあげている。コガワは、こうした白人中心主義的なメディアによる身体的表象を強烈に批判している。実際にビート畑の労働を体験したナオミは、「思い出すのさえつらくて耐えられない」、「悪夢」であり、「苦難」という言葉がぴったりくるものであったと語っている（232）。これは当時ビート畑で働いた多くの日系人の真実の声を反映したものである。

エミリーは、強制立ち退きの際には父親と一緒にトロントの知人のところに世話になる。それゆえ人種的偏見が少ない都市の比較的恵まれた環境に安住してきた彼女には、アルバータ州の農村におけるビート畑の過酷な労働や冬の寒さに凍えた体験について、実感できないとナオミは暗に批判している。つまりエミリーは公的な歴史にとらわれ、ナオミのような身体化された記憶に耳を傾けていない。エミリーは、典型的な二世としてナイーヴなくらい純粋にカナダ国家に対して忠誠を示し、白人主流社会に同化しようとしたが、人種的偏見のため裏切られてしまったとい

う感情を抱いている。彼女は『いつか』にも登場し、リドレス運動に身をささげ、戦時中のカナダ政府の日系人に対する不正を追及する姿が描かれている。前述のように彼女は日系カナダ人の活動家であり、ジャーナリストでもあったキタガワをモデルにしていると言われている。ちなみにキタガワも実際に、特別の許可を得てトロントに転住している (Miki 44)。

キタガワは、トロントで医学を学んでいた弟に宛てた手紙で、家畜品評会場であったヘイスティングスパークの不衛生な施設や、また人権を無視したプライバシーのない生活状況を厳しく非難している (Kitagawa 114-15)。同様にコガワもエミリーを通して、女性の視点から強制収容所の様子を記している。

エミリーとは対照的なのがおじ夫婦で、彼らは抗議することもなく黙々と生きる。彼らの沈黙の中に、キリスト教的な忍耐と寛容さをみることができる (Cheung 145) かもしれない。しかしそれよりも文化的、世代的差異によって、カナダやアメリカに移住した日本人 (一世) たちの多くは、沈黙を守ってきたと考えることのほうが自然ではないだろうか。また二世と違って、カナダに帰化することが許されなかった一世の社会的立場も大きな要因になっている。小説のなかで繰り返される伝統的な日本文化を表現している「仕方がない」とか「こどものため」という日本語は、消極的な諦めを表す言葉であるというよりも、人種差別という抑圧の下で生きる日系人たちの強靭な忍耐力を示している。つまりそれは悲惨な状況のなかでサバイバルしようとする強固な意志でもある (Kawamoto 71)。また同時にこうした日本語には、英語では表現することのできないほど複雑な思いが込められた重層的な意味を含んでいるのである。

3. 不在の母

この小説は円環構造になっていて、最終部分は冒頭につながっている。ナオミはおじの葬儀の直後に初めて母の死の真相を知らされ、ある意味でクライマックスを迎える。おじはかつて船大工として海の世界に生きてきたが、太平洋戦争の勃発によって船は没収され、BC州沿岸部に居住することができなくってしまった。彼は内陸部の大草原で、「いつか」バンクーバーに戻れることを夢見ながら、結局夢は実現することがなかったのである。

> Once, years later on the Barker farm, Uncle was wearily wiping his forehead with the palm of his hand and I heard him saying quietly, "Itsuka, mata itsuka. Someday, someday again." He was waiting for that "someday" when he could go back to the boats. But he never did (26) .

彼の言葉の奥に秘められた無念の想いは簡単には言い尽くせないものであり、ここでも日本語を交えることによって当時の多くの日系カナダ人の感情を代弁している。"Itsuka" という語は、前

述のように続編ともいうべき小説のタイトルになっている。コガワにとって意味深いことばである。一世たちにとって実現できなかったこと—日系カナダ人の名誉回復や償い—がこめられている。彼らは住み慣れた家を失い、同時に職も失って見知らぬ内陸部のゴーストタウンに移住させられ、戦後も1949年までBC州に戻ることがかなわなかったのである。ロッキー山脈の東側に移動を強制され、ナオミたちのようにアルバータ州などの平原諸州に移るか、トロントやモントリオールなど東部の大都市に再定住することになる。おじは決してナオミに不満をこぼしたことはなかったが、その沈黙の中にすべてを失った悲しみが顕在化することなく埋もれている。

ナオミの兄であるスティーヴンは、両親に代わって育ててくれたおじ夫婦の伝統的文化に根ざした日本的な心情を理解できない。彼は典型的な日本人気質のおばや、ピジン語のような英語を話すおじをあからさまに軽蔑するようになる。彼は支配文化のなかで文化的剥奪を受け、また否定的な自己意識を植えつけられ、自分のエスニック・アイデンティティに対する劣等意識が染み付いてしまっている。彼は音楽家として世界をまたにして活躍しているにもかかわらず、ナオミの視点から矮小化されて描かれている。

ナオミは兄とは対照的に、母やアヤおばさんの影響を受け、伝統的な日本文化を受け容れることができる。しかし彼女は二人の「おばさん」に代表される語りと沈黙、中心と周縁といった二項対立的な思考から脱却しようとする。スティーヴンのあからさまな日本文化への嫌悪は世代的、文化的ギャップによるものでもあるが、ナオミは複数の文化に跨った、文化横断的な第三の道を模索するようになる。ナオミはカナダ生まれの三世であるが、周縁的(マージナル)な存在として、アイデンティティの問題に悩まされてきた。

ナオミは、戦後になって主流社会の白人たちがこれまでの人種主義について他人事のように語り、あるいはカナダ生まれの日系人に対して旅行者か、一時滞在者とみなす言葉に憤慨する。そうした言説のなかに、植民地主義の残照であるポストコロニアルな「まなざし」が潜んでいるからである。

> "It was a terrible business what we did to our Japanese," Mr.Barker said. Ah, here we go again. "Our Indians." "Our Japanese." "A terrible business." It's like being offered a pair of down the street. The comments are so incessant and always so well-intentioned. "How long have you been in this country? Do you like our country? You speak such good English…Have you ever been back to Japan?" (270-71)

上記の引用には過去の過ちに対して加害者としての記憶を忘却しており、日系カナダ人が戦時中隔離された記憶を踏みにじるものがある。日系人のようなマイノリティを不可視的な存在として周縁化、他者化しようとする白人中心主義の言説に対する批判がこめられている(注9)。

そのような白人とは対照的なのが先住民のラフロックである。彼はナオミが7歳のとき湖で溺れかけているところを救ってくれた命の恩人でもある。彼の語りには人種による差異の二項対立的な思考に対する批判がこめられていて、多くの白人や日系人の子供たちにみられる肌の色の違いによるカテゴリー化を超越しようとする多文化主義的な言説が表現されている。

> "Don't make sense, do it, all this fuss about skin?"…"Well this here is an Indian brave."…"Long time ago these people were dying, All these people here. Don't know what it was. Smallpox, maybe. Tribe wars. Starvation. Maybe it was a hex, who knows? But *there's always a few left* when something like that happens（172. イタリック体は著者による）.

疫病や飢餓、白人による組織的暴力にもかかわらず生き残った先住民の歴史は、日系カナダ人の迫害やサバイバルの歴史を分節化しているのではないだろうか(注10)。このように、コガワは必ずしも現状を悲観的に考えているのではなく、上記の引用のイタリック部分にあるように、絶望的な状況下にあっても、生を肯定的に捉えようとする姿勢を見ることができる。Willisはラフロックがナオミを精神的にも救ってくれたと指摘している(246)。

つまり第37章でナオミの母の悲劇的な死が明らかになるが、ラフロックの語りと同様、極限的状況にもかかわらず、生の可能性が語られている。それゆえ戦争の悲惨さ、残酷さを訴えながらも感情を抑えた語りになっている。母の長い間の不在の謎が明かされ、すべては「子供のため」に大人たちが沈黙を守っていたことが初めて読者にも知らされる。

中山牧師によると、３月10日の東京大空襲で母の実家である加藤家の人々は帰らぬ人となり、そして8月９日の長崎の原子爆弾投下の際、たまたま長崎の親類の家に来ていた母は、被爆して重傷を負ったことがナオミの祖母の手紙から明らかになる。原爆で醜い姿になった母は、根源的生命の象徴である大地の陵辱を意味するのではないだろうか。ナオミと母はある意味で、ともに身体的陵辱を受けたことになる。過去30年もの間、日本に里帰りしたまま消息を絶った母の不在と沈黙の意味をナオミは理解するのである。

東京大空襲からはや60年がたった今日、数多くの被災者たちはいまだに過去の出来事を鮮明に覚えていて、語ることすらできないでいるという記事が新聞に掲載されていた(『毎日新聞』2005年3月16日)。一晩で10万人もの生命が奪われた「あの苦しみを誰かと分かち合いたい」と共感を求めながらも、あきらめ続けてきた人々が数多くいるそうである。そうした人たちの多くは当時戦争に直接関与しない民間人、特に女性や子供たちで、これまでトラウマ的記憶を封印してきた。しかしこうした悲惨な体験をした人たちは、苦しみを分かち合う、すなわち過去の悲惨な出来事を語り合うことによって、「大きな荷物を降ろしたような」安らかな気持ちになったのではないだろうか。

ナオミと母は、ともに暴力によって沈黙を余儀なくされたのである。母は原子爆弾という大量殺戮兵器によって傷つき、ナオミは性的暴力によって、ともに心を閉ざしてしまった。前述の大審問官に問いただされる夢といい、また兵士が若い女性を銃で脅す夢といい、ナオミは幼い頃受けた性的暴力の記憶を内面に抑圧してきたが故に、こうした悪夢から解放されることがなかった。そのため男への恐怖が無意識の世界で増殖され、彼女はいまだ独身生活を続けている(注11)。

次の引用には、ナオミが沈黙を破って、自己をさらけ出そうとする意志が語られている。母やおばさんに体現された日本人性、つまり家父長制の下での日本人的アイデンティティは、女性に沈黙と抑制を強いる抑圧的な文化規範でもある。

> I want to break loose from the heavy identity, the evidence of rejection, the unexpressed passion, the misunderstood politeness. I am tired of living between deaths and funerals, weighted with decorum, unable to shout or sing or dance, unable to scream or swear, unable to laugh, unable to breathe out loud (218).

ナオミの言葉からは内面の抑圧状態から解放されたいという、心の奥底からの叫びが聞こえてくる。それはナオミの喪われたアイデンティティの探求でもある。彼女は伝統的な日本人の女性性—優しさ、大人しさ、控えめ、沈黙—の殻を打ち破ってエミリーのように声をあげること、抗議をしたり、踊ったり歌ったりする自由を求める。これまでのように過去(死)に憑かれるのでなく、現在(生)を取り戻そうとするのである。

かつて中上健次は、安岡章太郎や野間宏との対談の中で、差別を受けたマイノリティの文学について、「糾弾の文学や叫びの小説は、一回性しか持たない」(56)と語っている。つまり単なるマイノリティとしての文学、差別の被害者としての文学という枠を突き抜けなければならないのである。コガワは日系カナダ人の不幸な体験や、カナダ政府の人種差別的な政策を糾弾するだけでなく、豊かな感性と創造力によって繊細な心理描写や自己探求を読者に示し、言語芸術としての文学の普遍性を追求している。

> Father, Mother, my relatives, my ancestors, we have come to the forest tonight, to the place where the colors all meet—red and yellow and blue…My loved ones, rest in your world of stone. Around you flows the underground stream. How bright in the darkness the brooding light. How gentle the colors of rain (295).

上記の引用には、中山牧師が母について語った黙示録的で悲惨な出来事とは対照的に、ナオミの心象風景を映し出し、平和で静寂な自然描写が見られる。また女性的で繊細かつ豊潤な詩的イメー

ジが醸し出されていて、生を肯定するヴィジョン（オルセン 86）とともに読者に深い感動を与えてくれる。

ナオミは、以前おじと二人で毎年夏になると出かけた谷間に行って、今は亡き両親やおじ、そして祖父母たちへの鎮魂の儀式を行なう。これは同時に戦時中、強制立ち退きによって家や財産を失い、一家離散の苦しみを味わった日系カナダ人全体に対する鎮魂でもある。ナオミは、過去の不幸な出来事の記憶に毅然として向き合って、それを語り直すことにより抑圧的沈黙から解き放たれる。すなわち「トラウマ的記憶」の呪縛から解き放たれ、心が癒されるのである（下河辺 198）。

上記の引用にある「すべての色が集う場所」（“the place where the colors all meet”）には、前に引用したラフロックの言葉にもあったように、肌の色の差異を超克してすべてをありのままに、そして対等に受け入れようとする姿勢―多文化主義の思想として解釈することもできる。つまり支配的な人種のヒエラルキーを脱中心化させるのである。また「闇の中に垂れ込める光」（“the brooding light”）は、これまで闇の奥に閉じ込められてきたナオミが、かすかな光を見出したことを暗示している。それは死から生への移行、すなわちナオミの再生（Peterson 167）を象徴していることは言うまでもない。

在日朝鮮人作家、金石範は1948年に起きた済州島における島民の虐殺事件(注12)に対する記憶について、「語れない記憶」、つまり「死者の声」を蘇らせることは抑圧と恐怖によって押し込められた、失われた記憶を取り戻すことであり、人間の再生と解放への自由の道であると述べている（74）。それは鎮魂（レクイエム）であり、コガワもまたナオミを通して語ることのできない過去の記憶や、「死者たちの声」を蘇らせることができたのである。ナオミは母との絆、すなわち母の愛を語り直すことによって内面の抑圧を克服する（Koppelman xix-xx）ことができる。

1980年代に風刺詩『五賊』を書いて韓国の軍事政権によって拘束されたことのある抵抗詩人金芝河は、「自分のアイデンティティが分裂した精神を治癒する」と述べている（176）。ナオミにとっても日系カナダ人としてのアイデンティティを再発見することが、「分裂した精神を治癒する」ことにつながるのである。したがっておそらくコガワ自身もまた、この小説を書くことにより、自分の内面の生を蘇らせることができたのではないだろうか。彼女は『おばさん』を出版した後、1980年代を通してリドレス運動に積極的にかかわっていくことになる。

次の引用には「生と死の和解」（石川　53）について描かれている。

> I am thinking that for a child there is no presence without flesh. But perhaps it is because I am no longer a child I can know your presence though you are not here. The letters tonight are skeletons. Bones only. But the earth still stirs with dormant blooms. Love flows through the roots of the trees by our graves（292）.

ナオミは肉体的な絆よりも精神的な絆を見出した（Cheung 152）。上記の引用において永遠なる大地は母を象徴し、また作品の中で「木」のメタファーになっていたナオミの母との精神的邂逅を通して、ナオミはこれまで失いかけていた母の慈愛を理解することができる。母との絆を認識することによって彼女は麻痺していた感覚から回復し、生命力を得ることができ、精神的な旅、すなわち自己探求の旅も完結するのである。トラウマの経験は、自己の同一性の物語を解体する経験である（片桐 43）とすれば、ナオミは自己の物語を構築する—過去の自己と現在の自己との和解によってトラウマを克服することができる。それは母とのつながりを再発見することによって可能になるのである。

小説の最後に語られている野生のばらや草花が力強く生い茂るさまは、生の息吹、つまりナオミの生命力の回復を象徴している。生命の循環は植物だけでなく人間にも見られる。彼女のディアスポラは同時に不在の母の探求であり、母性は民族を育む根源的な生命力の象徴である。再生の確固たるヴィジョンが提示され（クリフォード132）、日系カナダ人も差別や排除の経験を克服し、エスニックマイノリティとしてカナダ社会に根を張っていくことが暗示されている。

（注）

(1) G. Anzalduaは*Borderland*の序文で、英語と彼女の母語であるスペイン語を混在させることについて、それは「境界の言語」であり、そこには諸言語の交差点として言語が交互に受粉して生命力をよみがえらせると述べている（20）。

(2) http//:Kogawa.homestead.com./Tim Nakayama.html

(3) Gary WillisやNancy Petersonは次のように述べている。

The therapy proposed by the book is not just for Japanese Canadians, but for all Canadians, as Canada's future health as a democracy depends, at least in part, on its recognition of (and reparation for) its past failings (242).

On September 22, 1988, the Malrony Government announces a compensation settlement for Japanese Canadians and parts of *Obasan* were read aloud in the Canadian House of Commons (Peterson 168).

(4) 猿谷は長岡訳『おばさん』の解説の冒頭で、「1983年にわたしは始めて今小説を読み、深い感動に襲われたのを覚えている。海外日系人の間では文学が不毛なのかと思っていた矢先のことなので、尽きることのない豊穣なイメージに包まれたこの小説に出会い、心の底から驚嘆した」と絶賛している。

(5) Kogawa, *Obasan* 扉ページ。以下、テキストの引用は本文中に頁数のみを記す。

(6) 写真婚とは見合い結婚の変形であり、金銭的理由、あるいは徴兵を恐れて日本に帰国できない男性は、写真を送って女性との縁組を希望し、決まった場合には日本で花婿不在のまま結婚式をあげ、花嫁となった女性は写真を頼りに渡米した。白人からすると奇妙であるばかりか、女性の人権を無視した野蛮なものと映り、批判の的になって、1920年を境に禁止された（イチオカ182-95）。

(7) 小此木啓吾（22-32）参照。

(8) *Itsuka* のなかで、主人公ナオミは次のように語っている。"Over the years, the Japanese Canadian community went into hiding and became silent as rape victims." (208)

(9) R.Takakiは、肌の色の違いによって白人のタクシーの運転手から外国人の観光客と間違われた体験を述べている (Takaki, 270-71)。

(10) コガワはナオミのおじをアメリカ先住民の族長で、英雄でもあったシッティング・ブルと重ね合わせ、またおばをズールー族の戦士に見立て、白人によって生活手段を奪われ、抑圧を強いられながらも威厳を失わないマイノリティを日系カナダ人と重ね合わせている。

"Uncle could be Chief Sitting Bull squatting here. He has the same prairie-baked skin, the deep brown furrows like dry riverbeds creasing his cheeks (2-3).

Obasan would be as welcome there as a Zulu warrior (269).

(11) 36歳で小学校の教師をしているナオミは、ませた男子生徒から「オールドミス」と茶化されて苦笑している場面がある。この時点では、彼女は前向きに生きているとは思われない。

Spinster? Old maid? Bachelor lady? The terms certainly apply. At thirty-six, I'm no bargain in the marriage market (9).

また、姉妹作 *Itsuka* のなかで、中年女性になったナオミは牧師のセドリックの求婚を受け容れる。

(12) 1948年４月３日に起きたいわゆる4・3事件。米軍に支持された反共主義者たちが、反体制主義者やその家族を虐殺・生き埋めにした事件。済州島の島民の4人に1人が犠牲になったといわれている。

参考文献

Anzaldua, Gloria. *Borderlands: The New Mestiza*. San Francisco: Aunt Lute Books, 1999.

Caruth, Cathy. *Unclaimed Experience: Trauma, Narrative and History*. The Johns Hopkins UP. 1996.

Cheung, King-kok. *Articulate Silences*. Ithaca: Cornell UP, 1993.

チョウ、レイ「エスニックなおぞましさの秘密」本橋哲也訳、『別冊思想：トレイシーズ』第2号、岩波書店、2001年

―. 『デイアスポラの知識人』本橋哲也訳、青土社、1998年

Chua, Cheng Lok. "Witnessing the Japanese Canadian Experience in World War II: Processual Structure, Symbolism, and Irony in Joy Kogawa's *Obasan*". Eds. Shirley Geok-Lim and Amy Ling. *Reading the Literature of Asian American*. Philadelphia: Temple UP, 1992.

クリフォード、ジェイムズ「ディアスポラ」有本健訳『現代思想』6．青土社、1998年

Duncan, Patti. *Tell This Silence*. Iowa City: The U of Iowa P, 2004.

Eng, David L. *Racial Castration: Managing Masculinity in Asian American*. Durham: Duke UP, 2001.

Goellnicht, Donald C. "Minority History as Metafiction: Joy Kogawa's *Obasan*." Tulsa *Studies in Women's Literature* 8 (1989) : 287-306.

―. "Blurring Boundaries: Asian American Literature as Theory" Ed. King-kok Cheung. *An Interethnic Companion to Asian American Literature*. Cambridge: Cambridge UP, 1997.

グリッサン、エドアール『関係の詩学』菅啓次郎訳、河出書房新社、2000年

ホール、ステュアート「文化的アイデンティティヒディアスポラ」小笠原毅訳『現代思想』３月臨時増刊、vol. 26-4　青土社、1998年

Harris, Mason. "Broken Generations in *Obasan*: Inner Conflict and the Destruction of Community," *Canadian Literature* 127 (1990) : 41-57.

イチオカ、ユウジ『一世』富田虎男他訳、刀水書房、1992年

飯野正子『日系カナダ人の歴史』東京大学出版会、1997年

石川美子『自伝の時間』中央公論社、1997年

磯崎由美「語れなかった東京大空襲」『毎日新聞』３月16日、2005年

Kanefsky, Rachelle. "Debunking a Postmodern Conception of History: A Defence of Humanist Values in the Novels of Kogawa" *Canadian Literature* 148 (1996) : 11-36.

Kaoru Ikeda. "Slocan Diary" Ed. Keibo Oiwa. *Stone Voices: Wartime Writings of Japanese Canadian Issei*. Montreal: Véhicule Press, 1994.

鹿島徹「記憶の共同性と文学」小森陽一他編『岩波講座：文学９』岩波書店、2002年、41－59.

Kawamoto, Judy Y. "A Japanese American Therapist Discovers Feminist Therapy" *Racism in the Lives of Women*. Eds. Jeanne Adleman et al. New York: Harrington Park Press, 1995.

河原崎やす子「Joy Kogawa」植木照代、ゲイル・K・佐藤他著『日系アメリカ文学』創元社、1997年、121-23

Kim. Elaine H. *Asian American Literature: An Introduction to the Writings and their Social Context*. Philadelphia: Temple UP, 1982.

金芝河「「弘益人間」と「新人間主義」の文化精神運動が南北を救う」朴鉄民編『在日を生きる思想』東方出版、2004年

金石範『虚日』講談社、2002年

Kitagawa, Muriel. *This is My Own: Letters to Wes & Other Writing on Japanese Canadians, 1941-1948*. Ed. Roy Miki. Vancouver: Talonbooks, 1985.

Kogawa, Joy. *Itsuka*. Toronto: Viking, 1992.

—. *Obasan*. New York: Doubleday, 1994.

コガワ、ジョイ『失われた祖国』長岡沙里訳、中公文庫、1998年

Koppelman, Susan.Ed. *Between Mothers and Daughters*. New York: Ther Feminist Press, 2004.

Magnusson, Lynne A. "Language and Longing in Joy Kogawa's *Obasan*." *Canadian Literature* 116 (1988) : 68-82.

長岡沙里「訳者あとがき」『失われた祖国』461-66頁

中上健次『中上健次発言集成』６　柄谷行人他編、第三文明社、1999年

小此木啓吾「心的外傷としてのレイプ」『イマーゴ』４、青土社、1993年

オリヴィエ、エミール「未来にためされる根下ろしと移動」恒川邦夫他編『文化アイデンティティの行方』彩流社、2004年

オルセン、テリー「まえがき」クローディア・テイト編『黒人として女として作家として』晶文社、1986年

Peterson, Nancy J. *Against Amnesia*. Philadelphia: U of Pennsylvania P, 2001.

猿谷要「解説」『失われた祖国』467-74頁

下河辺美知子『歴史とトラウマ』作品社、2000年

Sunahara. Ann Comer. *The Politics of Racism: The Uprooting of Japanese Canadians During the Second World War*. Toront: Lorimer, 1981.

ストラウス、A．L『鏡と仮面—アイデンティティの社会心理学』片桐雅隆訳　世界思想社、2001年

Takaki, Ronald. *A Different Mirror: A History of Multicultural America*. New York: Back Bay Books, 1993.

載エリカ『多文化主義とディアスポラ』明石書店、2001年

高村宏子他『引き裂かれた忠誠心』ミネルヴァ書房、1994年

竹沢泰子『日系アメリカ人のエスニシティ』東京大学出版会、2000年

Weglyn. Michi Nisimura. *Years of Infamy: The Untold Story of America's Concentration Camps*. Seattle: U of Washington P, 1996.

Willis, Gary. "Speaking the Silence: Joy Kogawa's *Obasan*. *Studies in Canadian Literature* 12（1987）: 239-49.

Yogi, Stan. "Japanese American Literature" *An Interethnic Companion to Asian American Literature*,